

<礼拝説教> 2014年4月6日

あなたがたに一切重荷を負わせない 初代の教会—69

使徒言行録 15章 19～29節 ヨハネ黙示録 2章 12～16節

武田 真治

1 エルサレム会議

キリスト教会の長い歴史の中で、教会全体の存続に関わるような、重要な決定を下さなければならぬ時に追い込まれることが何度かありました。その度に、教会は全体会議を開いて判断をして来ました。誰か一人の独裁者にその決定を委ねたということはないのです。そのような全体会議として初めて開かれた会議が、ここにある「エルサレム会議」でした。初代の教会の使徒や指導者たちだけでなく、近隣の教会の代表者たちも集まったと考えられています。

この会議の発端とは、パウロとバルナバなどの異邦人への伝道によって、各地に異邦人たちを中心にしたキリスト者の群れが起こされるようになりましたが、それらの新しい群れに対して、ユダヤ人クリスチャンの一派が、わざわざエルサレムから出向いて来て、その新しいクリスチャンたちに割礼を受けることやモーセの律法を守ることを強要し始めたことにありました。おそらく、イエス様はユダヤ人であったのだから本当のキリストの弟子になるには、先ずユダヤ人にならなければならないと主張して各教会を回ったと考えられています。

このようなユダヤ人派の扇動に対して、パウロとバルナバが「それは間違いだ。エルサレム教会はこのようなことを許しているのか」と提訴したことから、教会全体の今後に関わる問題であるということで開催された全体会議でした。AD48年頃の出来事であろうと想定されています。

2 会議の決議事項の報告

長い討論の末、決議されたことを、特に迷惑を被った異邦人教会に宛てて書かれた手紙が23節以下に記録されています。ここから、この会議では三つの決定がなされたことが分かります。

一つは「聞くところによると、わたしたちのうちのある者がそちらへ行き、わたしたち

から何の指示もないのに、いろいろなことを言って、あなたがたを騒がせ動揺させたとのことです。」とあるように、新しい教会に入り込んできた人々は、勝手に行動している者たちであり、エルサレム教会は彼らを支持していないし、煩わせてしまったことをお詫びしています。

次には「人を選び、わたしたちの愛するバルナバとパウロとに同行させて、そちらに派遣することを、満場一致で決定しました。」です。エルサレム教会から人を遣わすということは、この手紙だけでなく口頭でも「お詫び」をするためでした。そして大事な点は、これまでユダヤ人以外の民邦人への伝道を続けてきたバルナバとパウロを評価し、改めてエルサレム教会から異邦人伝道へと派遣するという意味も込められている点です。これにより彼らは異邦人伝道を、大手を振って行うことが出来るようになったのでした。

そして最後が「聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。」です。もはや自由に、何の束縛もなく異邦人伝道は進められて良いこと、異邦人は異邦人のままで救われることが正式に認可されたと言い得るでしょう。以後、どのような人も、その置かれた状態で救いへと招かれ、ただ洗礼を受けることによってクリスチャンとなることが定まったのでした。

このことは当たり前だと思われるかも知れませんが、実は「洗礼のみ」ということも全体会議で決められたことであつたのです。決して各自の自由な判断によって、洗礼を受けなくてもクリスチャンになれるとか、聖餐式を受けられるということではないのです。もしそのことを認めほしいと思うならば、同じように教会全体会議で決定すべきことなのではないでしょうか。

そして、洗礼を受けること以外にクリスチャンになる時には要求されないということも大事なことです。私たちはどうしても何か他の条件を付け足したくなります。りっぱな人間になることとか、お酒やタバコを止めるとか、中には輸血をしない、運動会に参加しないことまで加えようとする団体まで出てくる始末です。しかし、それらは間違いであることが明確なのです。

3 次の必要な事柄を慎んでほしい

ただ、このエルサレム会議で、異邦人に「一切重荷を負わせない」と決められたのに、そこにあたかも条件ではないかのかと疑いたくなる付帯条項が付いています。それが「次

の必要な事柄以外」と言われている点で「すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。以上を慎めばよいのです。」と。これらはまるで洗礼の条件と言っているかのように思えます。そうではないのでしょうか。

ここで「必要な事柄」と言われていることは、いったい何に必要とされることなのでしょう。実は、これらはこの前にあったヤコブの言葉から来ています。彼はこの会議の議長であったと考えられ、その議長裁定として「わたしはこう判断します。神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません。ただ、偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けるようにと、手紙を書くべきです。」と述べており、この言葉に従って先の手紙が送られたのでした。

ここでヤコブが考えていたことは、異邦人伝道に何の妨げがなくなることは、これから先いづれ、異邦人クリスチャンとユダヤ人クリスチャンが同じ礼拝、同じ教会に集うことになることを意味すると。そこまでは良いかもしれませんが、もし両者が同じ食卓テーブルに着くであろうことを考える時に、これらの作法を異邦人の方で配慮してくれないだろうかと頼んでいるということです。だから、肉や血という食べ物に関することになっているのです。

ユダヤ人は今までユダヤ人以外の民族や人種とは決して同じ食事卓に着きませんでした。彼らには食べてよい食品と禁止されている食品とが厳格に決められていたからです。もしユダヤ人以外の人と食事を一緒にしてうっかり禁止されている食品を食べますと「汚れてしまう」からでした。しかし、イエス様の名前によって洗礼を受けた者同志、これからは自分たちユダヤ人クリスチャンも異邦人クリスチャンと同じテーブルに着こうと、それでこそ本当の信仰の交わりではないかとヤコブは真剣に考えているのです。それはユダヤ人にとっては勇気の要る、画期的なことです。それ故、最初の内だけでも良いから、これから一緒に食卓に着くときに、これまでのユダヤ人の生活習慣について異邦人側が少なくともこれぐらいの配慮をして欲しいという申し出であったと考えられます。特に、ローマの食卓は乱れており、食卓が社交場のようになっていました。みだらな行い（＝乱れた結婚や関係を指します）を慎んでほしいということもここに関わります。

バルナバやパウロはそこまで考えていなかったかもしれません。お互い、ユダヤ人はユダヤ人で、異邦人は異邦人で集まればよいと思っていたかもしれません。しかし、本当に

教会が一つになるということはユダヤ人であろうが、異邦人であろうが、一緒に集い、一緒に礼拝し、一緒に食卓を囲む交わりではないでしょうか。それは、お互いの状況や育ってきた環境や習慣を無きものとして接するのではなく、各々の状況をちゃんと理解し、配慮し合うことから始まるのではないかと、今の私たちの教会にも通じる教えではないかと思えます。

4 兄弟をつまずかせないために

解説者の中には、ここでヤコブの頭の中にあつたことは何より「聖餐式」ではなかったかという人もいます。ユダヤ人も異邦人も共に聖餐に集うために、互いに慎みを持って集おうと！その場合の「慎み」は何より悔い改めの心でしょう。お互いに自らを省みて主の食卓に集いたいものです。

パウロは後に、そのコリントの信徒への手紙で、ここで挙げられている点を取り上げて「偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています」と語り、偶像に供えられていようがいまいが気にすることはないと教えています。しかし、そう言いながら続けて「しかし、この知識（＝偶像など関係ない）がだれにもあるわけではありません。ある人たちは、それが偶像に供えられた肉だということが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありませんが（中略）食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません」（第1、8章4節以下）と述べています。これこそ自ら慎む態度ではないでしょうか。それは同じ信仰の友を「つまずかせない」ための配慮なのです。互いを思いやる心使いや奉仕が、実は教会の交わりを保ってくれているのです。感謝です。（説教より抜粋）